

# 月刊 やちまなこ

2014.6.15 発行

No. 199

## 6 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



### 湿原散歩

川沿いを歩いていたら、オオジシギが飛んでいた。  
ジュツ、ジュツ、ジュツと鳴きながら、ある程度の高さから尾羽を広げ急降下。独特な羽音を立て、ディスプレイ・フライトを繰り返していた。縄張りや雌を引き付けるための行動で、その中から雌は気に入った雄を見つける。雛が育つ10月頃には、残念ながらパートナーを組めなかった雄も栄養を蓄え、約9000キロ以上離れた越冬地のオーストラリアへ向け、長旅が始まる。



## コッタロ川と湿原のほとりから

### 168 6月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住・中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

“緑陰に赤腹キョロンキョロン哉”の昨今、繁殖真最中の夏鳥達の餌捕り合戦が続いております。中でも独特の甲高い鳴き声と、尾羽を器用にくるりくるり廻す仕草で他との判別の目印にもなっている大百舌が珍しくも複数羽いて、たまたま何かをハリエンジュの針に突き刺した瞬間をパチリ！よくよく観れば例の早贄で、“オオモズや蛙干したる五月晴れ”の一日でした。

一方、コッタロ川には柳の枝葉を通す日の光が水面にチロチロと不思議な紋様を波打たせている中、のんびりと気持ちよさそうにエゾアカガエルが悠然と泳ぐのを眺めているうち、こちらにも油然と詩想がわいてくるのを覚えたではありませんか。そう言えばこの川には4月17日からのほぼひと月間、幻の魚「イトウ」が6～8尾で婚姻パーティに明け暮れ、♀♂入り乱れての産卵行動時、まるで緋鯉の如きまっ赤な♂の魚体がレンズに入り切らずに部分撮りとなってしまった一枚を御覧下さい。その折の卵の数は知る由もありませんが、すでに発眼卵から脱し川を上り下りしていることでしょう。

ところで、一気に暖かくなるかに思えた初夏のコッタロは、6月7日からの冷たい霧雨に見舞われて、ぐずついており、肌寒い朝夕となっております。折角動き出した季節の足止めで、喜んでいるのは蛙ばかり。今季三度目の大合唱は大オーケストラとなって夜の大地に響き渡り、かつてない賑わいですよ。

さて、しばらくの間忘れられていたエゾ鹿等が、庭に出没するようになって面白い光景で楽しませてくれたり、畑仕事中に、そそくさと土中から這い出て逃げ出す百足の家族（1cm～1.5cm位迄）との出会いもまた珍しく、その一部を写しましたので御覧に入れましょうね。九州の黒いムカデしか見たことが無く、ここのは白系なのか、それとも発達段階なのか、はたまた百足もどきかも知れない云々、等と話しているところです。



ワタスゲが見られるようになりました。塘路ではサルルン沼のほとりに小群落があり、道路から遠目に眺めることができます。間近で観察するなら温根内木道がおすすめです。4～5月にミズゴケ湿原で筆の穂先に似た花を咲かせますが、まだ草丈が短くあまり目立ちません。6月頃から見られるのは、風に飛ばされる前のタネの姿です。球状の白い綿毛が、伸びた茎の先でふわふわゆらゆらと初夏の湿原を彩っています。



じーっと耳を澄まして・・・新緑の野鳥観察

タンチョウコミュニティの音成邦仁氏の解説で「新緑の湿原バードウォッチング」を行いました。木々の若葉で鳥の姿が見つけにくいものの、耳を澄まして自然と一体となって観察しました。蝉しぐ



れで鳥の声が聞き取り難い所では、落とし文を観察し、参加者は葉の中に何が隠れているのか、講師の手元を食い入るように見つめていました。上空を高速で飛ぶハリオアマツバメや参加者に人気のコムドリなど、21種類の野鳥との出会いを楽しみました。



拾ったトビの羽で、野鳥の羽のしくみを解説中  
鳥の巣穴かも！？幹の穴を観察中

ネムネムのとうろうろう日記 Vol.49 「生きているタヌキ出現」

窓をふと見ると、郷土館前の芝生にエゾタヌキがいました。すぐカメラを掴んで外に出て動画で撮影、生きているタヌキを堪能しました。

哀しいかな、郷土館は生きているケモノにあまり縁がありません。運ばれてくるのははく製の死体ばかりです。普段、はく製の製作は専門業者に頼んでいますが、何年か前、タヌキの死体が毎日のように郷土館に運ばれてきて、標本製作費も底をつき、大型冷凍庫もないので処理に困ってしまいました。

そこで仕事で動物標本を作っている友人に相談したところ、頭骨の標本を作ることを提案されました。作り方を聞くと「まずナタか何かで頭を落としてですね・・・。」「頭が入る鍋か何かで煮るんです。すごい匂いがしますから、室内でやるのはオススメしません。」平然と話す彼女の話には私はすっかり怖気づき、とにかく土に埋めて、土中の生き物たちに食べてもらう、というソフトな方法で勘弁してもらいました。

しかしサスペンスドラマか何かで、湿度の高い土地に埋めると、死蟻(しろろ)化といって、死体がそのままの形で残る、という話を聞いて以来、怖くて掘り起こせないのです。とはいえ、今年こそ掘り起こさねば・・・。辻 ねむ(標茶町郷土館学芸員)

6がつ 4にち	ばしょ とうろ
---------	---------

鼻先を地面につけて歩きまわり、ミミズや虫を食べていました。お願いだから、ウチに死体では来ないでね。

